

## 第25回青森県総合教育会議会議録

- 1 期 日 令和7年3月21日（金）
- 2 開 会 午前10時
- 3 閉 会 午前11時
- 4 場 所 第三応接室
- 5 議 事 青森県教育施策の大綱（改定案）について  
青森県立高等学校魅力づくり検討会議 検討結果報告書について

### 6 出席者等

・出席者の氏名

宮下宗一郎（知事）

風張知子（教育長）、平間恵美（教育委員）、新藤幸子（教育委員）、

安田博（教育委員）、松本史晴（教育委員）、中野博之（教育委員）

・説明のために出席した者の氏名

奈良浩明（総合政策部長）、後村文子（総合政策部次長）、田澤謙吾（総合政策課長）

長内修吾（理事）、早野英明（教育次長）、高橋和也（教育政策課長）、

佐藤広洋（高等学校教育改革推進室長）

## 7 概 要

### 知事挨拶

教育政策の大綱については、皆さんと様々な意見交換をしながら、パブリック・コメントを含めて、一定の方向性を示せるようになった。

本日は、まずそのことについて皆さんと改めて意見交換をさせていただきたい。

それから、県立高等学校の魅力づくり検討会議の検討結果である報告書について内容を共有し、これから高校に入学するこどもたちの教育環境について、次期計画の策定を含め、皆さんと共通理解を図っていきたいと考えているため、よろしく願います。

### 議事 青森県教育施策の大綱（改定案）について

（田澤総合政策課長）

資料1に基づき、前回の総合教育会議で示した改定素案に対するパブリック・コメントの実施結果を御説明する。

実施期間は令和7年2月12日から3月13日までの30日間となり、実施結果としては2名から合計4件の意見提出があった。

対応方針は、文書修正等に対応するものが3件、実施段階で検討するものが1件となる。

具体的なものとして、1つ目は「はじめとする」と「始めとする」が混在しているため、「始め」に統一するもの。

2つ目は六戸学園の開校を踏まえ、「小・中学校」という記載を「小・中学校（義務教育学校を含む）」に修正するべきという意見をいただいた。これについては、「小・中学校」あるいは「小・中・高等学校」という表記が何ヶ所かあるため、脚注で整理し、大綱の7ページに脚注を追加している。

3つ目は13ページの内容となるが、「県立美術館等の企画の充実」という文言を、郷土館の企画の充実も記載するべきという意見をいただいた。これについては、県立の展示施設が美術館や郷土館だけではないため、「県立美術館等、県立の展示施設の企画を充実」という表現に改めることとした。

4つ目は「中学校部活動の原則入部の考え方の見直し」という文言を、「校長を的確に指導し、中学校部活動では原則全員入部ではなく任意加入とする」にすべきという意見をいただいた。これについては、任意加入とすべきという内容はそのとおりであるため、修正せず、実施段階で具体的な方法を検討するという扱いにするものである。

以上がパブリック・コメントの実施結果となるが、これらに加えて、前回の総合教育会議で松本委員からの「こどもを中心に考え」という部分に、こども基本法の理念を追記すべきである」という御意見を踏まえ、資料2の2ページの下に、脚注でその理念を追記したものである。

この対応については、事前に松本委員と調整し、御了解をいただいているものである。

この他にいくつか細かい字句の修正等もあったが、そちらの説明は割愛させていただ

く。

それらを踏まえたものが資料2の大綱改定案となり、この内容でよければ庁内の手続を経て、年度内に改定をする予定である。

(教育長)

御説明いただいた青森県教育施策の大綱については、パブリック・コメント等を経て、丁寧に議論いただいたことに感謝申し上げます。

これまでも大綱に基づき、県教育委員会としても教育改革を着実に進めてきているところである。来年度に向けて、予算面においてもいろいろと御配慮いただいたことにまず感謝申し上げます。

今回は「更なる改革の推進に向けて」という部分が追加され、魅力ある県立高等学校づくりの遠隔授業や単位制についても、魅力づくり検討会議から提案されていることも踏まえながら、既に来年度から取り組む予定の内容である。

今後とも大綱を軸に、知事とは様々なことを共有しながら、まずは子どもたちのための教育施策を推進していきたいと思っているため、よろしく願います。

## 議事 青森県立高等学校魅力づくり検討会議 検討結果報告書について

(佐藤高等学校教育改革推進室長)

現在、教育委員会では令和5年度から9年度までを計画期間とする高等学校教育改革推進計画第2期実施計画により、高等学校の魅力づくりに取り組んでいる。

本年2月、青森県立高等学校魅力づくり検討会議から資料3の検討結果報告書が提出され、2月25日の教育委員会臨時会へ報告した。

臨時会においては、更なる魅力ある高等学校づくりに向け、「令和10年度以降の方向性を示す新たな計画を作成すること」、「基本的な考え方を示す基本方針と、基本方針を踏まえた具体的な取組を示す実施計画に分けて、教育委員会会議で検討を進めること」、「各検討段階で県民に対して丁寧に説明と意見聴取を行っていくこと」が共有された。

本日はこのことに加え、今後の教育委員会会議における検討の論点について共有したいと考えている。

資料4の「第1 魅力ある高等学校づくりに向けた基本的な考え方」として、「1 高等学校教育を取り巻く現状」、「2 「魅力ある高等学校づくり」の視点」、「3 高等学校教育の方向性」がまとめられている。

「3 高等学校教育の方向性」では、「(1) これからの時代に求められる力の育成」、「(2) これからの時代に求められる人財の育成」のほか、「(3) 高等学校に求められること」として、「全ての生徒が安心して学べる環境づくり」や、「誰一人取り残さないきめ細かな教育の提供による生徒のウェルビーイングの向上」などが挙げられている。

「第2 学校・学科の充実の方向性」として、「1 これからの時代に求められる高等

学校の魅力づくり」では、「(1) 教育活動の更なる充実」として、「①各校の特色を生かした取組の推進」、「②ICTの活用による教育活動の充実」、「③特別な教育的支援を必要とする生徒への教育の充実」が挙げられている。

特に、①の「魅力の情報発信」や、②の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた対面指導と遠隔・オンライン教育の最適な組合せについては、具体的な検討が必要な論点と考えられる。

「(2) 多様な主体との連携・協働」では、「①高等学校間・学科間」、「②異なる校種間」、「③地域や関係機関等」といった多様な主体との連携が挙げられている。教育活動の充実に向けた連携・協働の在り方は、具体的な検討が必要な論点と考えられる。

「2 これからの時代に求められる力を育む学科等の魅力づくり」では、各課程・学科についてまとめられている。

「3 学校・学科の魅力づくりに向けた教育制度」では、各教育制度についてまとめられている。特に、「(2) 全日制普通科単位制」については、具体的な検討が必要な論点と考えられる。

「第3 学校配置の方向性」として、「1 魅力ある高等学校づくりに向けた学校配置の観点」では、「(1) 高等学校教育を受ける機会の確保」、「(2) 充実した教育環境の整備」が挙げられている。

「2 魅力ある高等学校づくりに向けた学校配置」では、「(1) 全日制課程」として、「①学校配置の考え方」、「②学校規模」、「③小規模校の配置」が挙げられている。また、「(2) 定時制課程・通信制課程」では、配置の考え方などが挙げられている。特に、①の「様々な役割を担う高校の配置」については、具体的な検討が必要な論点と考えられる。

「3 学校配置と合わせて検討すべき事項」では、「(1) 再編の方法等」、「(2) 学級編制」、「(3) 通学手段の確保・通学支援」が挙げられている。これらについても、学校配置と合わせて検討が必要と考えられる。

「第4 地域等の理解と協力の下での魅力ある高等学校づくり」では、計画の策定や推進に向けた対応が挙げられている。

## 意見交換

(平間委員)

2月に行われた教育委員会臨時会において魅力づくり検討会議の検討結果報告書を共有したところである。そのうえで早急に知事との共有の場を設ける必要がある旨を伝えたと、本日の会議を設定いただき感謝申し上げます。

また、先日たくさんの高校生が卒業したが、教育委員は各地域の高校にて卒業式に出席した。どの学校も本当に素晴らしい卒業式であり、これも学校現場の先生方の力であると実感した。

教育改革については、生徒1人1人がこれからの時代に求められる力を身に付けられ、学びの探究を深めることができる学校、こどもたちから選ばれる魅力ある学校とな

るために、検討結果や大綱にも記載があるように、環境整備と教育活動の充実は必須であると考えます。

この2つを進めるには、県全体が一体となって推進する体制づくりが重要である。

私も地元にいるこどもを見守る1人として、常にその重要性を実感している。そのためには1つの学校、1つの地域という視点ではなく、もっと柔軟に、学校や産業界、地域等がより有意義な関係性を構築し、県全体が一体となって高等学校教育の推進を図ることが重要であると考えます。

青森県の学校、産業企業、住民1人1人が、祭り等の文化を含めた資源をどうつなぎ合わせていくのか、こどもたちの学びが青森県の未来でどう花を咲かせるのか考えていたが、あおもり創造学の発表会を見て、連携の重要性を改めて実感した。

この考えは高校教育だけではなく、小・中学校でも必要であると考えます。

普段地域にいる身としては、地域と密着した連携や、コミュニティ・スクールの枠を超え、あおもり創造学のような学びが小・中学校でも展開されれば、それぞれの学びがステップアップされ、高校・大学において1人1人が自分の目標や夢に向かって学びの選択ができるのではないかと考えます。

これからも県教育委員会と市町村教育委員会が連携しながら頑張っていかなければならないと感じた。私たち教育委員も、それぞれの市町村の教育委員会と情報共有を図りながら、経営の方向性を御理解いただき、一致団結して推進していく必要があると感じたものである。

(中野委員)

私からは、授業等の教育活動の充実について話したいと思う。

各学校にてスクール・ミッションやスクール・ポリシーを作り、それに基づいて教育活動を行っている。スクール・ミッションは、その各学校の役割を踏まえ、自分たちの学校はどのような役割を持っているのかを明確にしたものであり、各学校ではそれを基に教育活動を行っていると考えます。

このようなスクール・ミッションやスクール・ポリシーによって、民主主義社会を形成していくための役割をみんなで分担しているという意識を先生方に持っていただき、何を担う人財を育てていくのかを考えることが重要であると考えます。

何を言いたいかという点、進学校に行った人間が優秀で、進学校ではない学校に行った人が優秀ではないということではなく、それぞれの役割を分担しているということを先生たちにも考えていただき、その中で学んでいるこどもたちも、自分はそういった社会の形成者なのだと考えていただきたいと思います。

ある地域の学校のスクール・ミッションやスクール・ポリシーを集め、AIにて分類したところ、ほぼ共通している要素として「主体性を育てる」、「協調性を育てる」、「社会への貢献」、「生涯にわたる学習意欲」といったものとなり、正しい方向にあると思っている。また、授業改善についても、「主体性や連携を育てる」や、「分かりやすい授業を行う」といったことを掲げている。

教育委員会にて考えなければならないことであると思われるが、これらは中学生に通じる言葉ではないと感じる。更に言うと、「主体性」、「協働性」とはどういうことか、

今ひとつ保護者や子どもたちに通じないのではないかと思われる。

教育委員会としては、スクール・ミッションを見て自分に合った学校を選ぼうという広報活動を行っている。You Tubeでも八戸東高校の生徒たちが作った大変面白い動画もあり大変頑張っているが、文章が非常に硬いため、もう少し子どもたちに通じるような形で役割分担を示していただければと思っている。

私は、新しい時代の教育とは、今までのように生徒に黙って言うことを聞かせることではないと考える。新しい時代の教育を受け入れる社会風土を作るためには、学校の先生たちだけが一生懸命頑張っても駄目であり、社会全体において考えていただきたいと常に思っている。

例えば、先日私も卒業式に出席したが、最後の卒業生退場の際に、先生方が生徒の前に緊張した様子で立っていると、ある生徒が先生に近寄り、ポンと肩を叩きニヤッと笑って退場していった。厳粛なる儀式の中でそういったことを許していいのかという意見もあるかと思われるが、私はその生徒から先生に対する、同じ人生の先輩としての仲間意識のようなものを感じ、とても微笑ましい光景であると思った。

つまり、これからの教育は、先生が子どもたちへ教えるのではなく、学問を探究する仲間として一緒に考えていこうという姿勢がとても必要であり、これが伴走者としての指導となる。

もちろん大人として社会のマナーや礼儀など、そういったことは協働性という意味でもしっかりと教えなければならない。その一方で、一緒に仲間として彼らを尊重するという姿勢も先生たちには持っていたきたいし、社会もそういった教育が行われているのだという雰囲気は是非持っていたきたい。そういう目で学校等を見ていただければ、主体性や協働性、伴走者としての意味がより具体的になっていく。それがスクール・ミッションやスクール・ポリシーに具体的に示されると、中学生にメッセージとしてかなり通じていくのではないかと思われる。

(松本委員)

私からは遠隔授業等について話をさせていただく。

中野委員から熱い思いがあり、伴走者についてはまさにそのとおりであると感じた。子どもの権利・主体性ということを考えると、子どもたちが先生と一緒にお互いを尊重し合いながら、自立した人として認められつつ、学問に取り組んでいく姿が必要だと思われる。

子どもの興味関心がどこにあり、それに対してどう答えていくかが、先生の役割として強く求められている。生徒の思いややる気など、そういったものに寄り添っていくためには、どうしたらいいかを考えると、生徒がそれぞれタブレットを使って興味関心に沿ったものを自分なりに探し、それを授業に組み込んでいければ良いと考える。

例えば教室にいたとしても、40名全員が違う動画を見たり、違う授業を受け、生徒個人の興味関心のあることへ積極的に取り組んでいけるような環境になるのではないかと考える。

もちろん興味関心は自分で決められることであるが、間違った方向に行かないように先生方が伴走するサポートも必要である。

タブレットで興味関心があるものを、より専門的に調べることができるため、大学の先生の論文等もダウンロードして見るができると思われる。

それから、社会活動をしたいこどもがいれば、遠隔授業をうまく取り込んでいろいろな社会運動の勉強もできると思う。

しかし、対面授業で生徒が一律に最低限の知識を身に付けることも必要であると思う。今後はICTをどんどん進めていくことができれば、こどもの希望に沿った学問に対する思いへ十分に答えていくことができるのではないかと考える。

(安田委員)

私からは少人数学級編制や単位制の教育制度等について話をさせていただく。

まず、今月行われた入試状況を見ると、特に私の出身である西北地区では、全校で定員割れという状況であった。非常に残念なことだが、来年以降も生徒減少は続くことから、早急に対応しなければならないと思われる。

そのために、今後は生徒に多様な学びを提供できる体制づくりという観点からも、単位制や、少人数学級編制が有効ではないかと考える。

また、学校や学科の特徴なども踏まえながら、きめ細かい指導を実施するためにも、最適な教育制度などの活用の在り方を検討していかなければならないとも思っている。

各校の生徒たちは、学習成績や部活動、資格取得、あおもり創造学における探究活動の報告など、既に様々な魅力を生徒自ら発信していると思われる。

今後少ない生徒数でも、何にでも取り組むことができる環境づくりのために、我々が垣根を越えて協力し、より良い教育環境、教育現場を構築していかなければならないため、これからも委員の皆さんと一緒に頑張っていきたいと考える。

(新藤委員)

私からは多様なこどもたちの対応について話をさせていただく。

まず、充実した教育環境の整備についてであるが、これからの時代はダイバーシティやインクルージョンが掲げられている。身体的特徴や発達特性、言葉や文化が異なるという特性など、様々な特性を持ったこどもたちが、自ら学びたいと思う学校を選ぶ際の選択肢が非常に少ないと感じている。

こどもたちが様々な特性を持ったまま学びを続けられる環境を整えていくことは、こどもの生きる権利や学ぶ権利を保障することに繋がることでもあるため、そういった環境面を整備していけたら良いと思っている。

また、不登校経験を有するこどもが増加していることを踏まえ、通級指導の拡充や、個に応じた学びの充実が図られるよう、全日制、定時制、通信制の課程に関わらず、各学校の中で特性をもったこどもたちを受け入れられる環境整備を進めていけたら良いと思っている。

やはり目の前に多様な人たちがいなければ、その人が何に困っているのか気づくことができず、そういった人に思いを馳せることは難しいと考える。

先日七戸養護学校の卒業式に出席させていただいたが、在校生のこどもたちが参加する中、「あー」「うー」といった声が聞こえる非常に賑やかな式であった。

その中でも、粛々と卒業する生徒たちを祝う、とても温かい雰囲気があった。このように、子どもたちが「嬉しい」「悲しい」「困っている」といった声を出すことができる状況や、何に困っているのか周りの人が気づくことができる社会を作っていくためにも、まず学校がそうなる必要があると思っている。

県全体のバランスを考えながら、様々な進路の規模に応じて学校配置を考える必要があると思うが、是非子どもの選択肢を広げるという視点を持つ必要があると考える。

(知事)

まず、教育政策の大綱についてである。昨年度から取り組んでいることと、新たに高等学校の魅力化、特色化、入試、授業というところに踏み込み、大綱ができ上がった。

これは青森県の教育にとって非常に大きいことであり、方向性を示す未来図を提示したと思っている。

これからも少しずつマイナーチェンジがあるかもしれないが、一旦教育改革の方向性について、セットできたと思っている。

教育委員会においては、これからは現場をどんどん変えていくモードに入ってくると思うため、是非現場の先生方にもこの改革の方向性をしっかりと御理解いただき、御協力いただける進め方をさせていただきたいと思う。

現在までも風張教育長のもと、これまでの前例にとらわれることなく、柔軟に現場の意見を聞きながら様々な制度改善をしていただいている。これは予算事業に関わらず進めていただいております、このことは現場でもかなり実感を持ってもらっていると思う。

しかし、今後もより一層スピード感を持ち、この教育施策の大綱の旗印のもと、様々な改革を進めていただきたいと思う。

私としても、予算や様々な知事部局の権限を通じて協力を惜しまずに支援していきたいと思っているため、よろしく願います。

県立高校の魅力づくりについては、これから再編についての議論が進んでいくと思われるが、やはり1学級当たりの生徒数を40人とする前提が非常に制度の柔軟性を削いでいる気がする。

先ほど安田委員からもそういった話があったが、青森県内でその点についてどう取り組んでいくのかがまず肝要になると思われる。

またその関連として、現在重点校、拠点校、地域校とあるが、この学校のクラス数も厳格に決まっている感じがあり、今までの考え方をどう変えていくのかがとても大事であると思う。

さらに、地域と学校の在り方というものを各市町村の政策と学校の在り方をしっかりと連動させてほしいと思う。これから子どもの数が減るため、学校の数が減っていくことが当然のことであると思うが、いかにして地域が学校を守っていくか、いかにして学校が地域を守っていくかを考えていけば、地域の政策との連動は必須である。その際には、地域の負担もある程度は求めていくことも大事であると思う。

そういった考え方をしっかりと高校再編の文脈の中に取り入れていただきたいと思います。

それから、授業改善についても魅力づくり検討会議の中で触れられており、個別最適

化が挙げられていた。これは高校だけではなく、小中学校も含めて実施すべきであると思う。高校については、単位制をどういった段取りで全県的に導入していくのが必須になると思っている。

次にあおもり創造学であるが、これは素晴らしい取組であると思う。

しかし現状だと、今までの学校の取組をそのまま「あおもり創造学」と称して発表している学校がある。一方で、とても時間を掛け、先生方の気持ちを込めて取り組んでいる学校もあり、学校ごとに差がある状況になっている。

今後はやり方を含め、どう発展させていくかという道筋を年単位で作成いただきたい。この取組は高校だけではなく、小中学校も巻き込むことができれば、非常に良い取組になると思うため、若者の県内定着に向けた大きな取組の一つになり得る素晴らしいものだと思う。是非その発展をよく考えていただきたいため、よろしく願う。

最後に、高校入試については、授業や高校再編の在り方と併せて考えていかなければならないと思う。

先ほど中野委員からも中学生の主体性の在り方について話があった。それについてとても問題意識があり、高校もそうである部分があると思う。一方で、中学生の主体性や内申書の在り方を含め、高校入試をどうするのがまず大事になる。

また、県立高校の出願が1人1校になっているが、複数の併願が可能になる制度を設け、魅力がある学校にたくさん出願できることが前提になれば、いろいろな高校を受けられる選択肢も広がって良いのではないと思う。

さらにこのことを突き詰めていくと、選抜性の高い学校は入試の日程について工夫が必要になるかと思われる。

そうしたことも含め世の中は大きく変わっているため、学校の在り方はどんどん変わってくる。これまで考えてきたことを前提とせず、時代の流れに追いつくのではなく、時代の流れの先を行くような高校の在り方を追究していくことが、本県の未来にとって非常に重要なことであると思っている。

このことについて、是非皆さんにもよろしく願う。

(平間委員)

知事がおっしゃったことは教育委員ミーティングでも時々話題になることがあった。

コミュニティ・スクールの在り方も、本来はまちづくりと連携するべきであると個人的に考えているが、なかなか地域づくりと学校教育が共有されていないのが実情である。

特に小中学校の地域連携では、地域の方たちのサポートは大きいものであるが、逆に言うとそれで留まってしまっている。

地域の協議会メンバーについても、これまでの在り方から枠を超える必要があるが、なかなか市町村教育委員会でも変えられない部分がある。

知事がおっしゃったように、これからの青森やそれぞれの地域づくりと大きく関わってくるため、市町村の事務局を含めて真剣に考えていただきたい。

そこで、学校現場の校長先生を始めとした先生方には、地域をつくるという意識を啓発していく必要がある。

また、地域の人材もこの意識を強く持たなければならないと思っている。自分たちの

地域の学校へ行って何かサポートするだけではなく、子どもたちを巻き込んで一緒にこの地域をつくり上げていくことをどう自分事として考えていくかが重要である。県民の皆さんにも、学校を通して子どもたちの力を借り、未来の青森がどうなるか考えていただく必要がある。

1日1日の大人の営みが将来の青森の子どもたちにつながることをしっかりと突き詰めていきたいと思う。

高校入試制度について、例えば進学校に入学して挫折し、不登校や学校を辞める子どもが大変増えていると感じる。高校の途中で目標を変え、県内の別の学校で学び直したいとなった際に、県外からであれば編入試験を受けて県立高校へ入学できる可能性があるが、県内でも同じことができれば良いと思う。

先ほど知事がおっしゃったように、進学校にも進みたいが、産業高校で研究を深めたいという子どももいるかもしれない。その際1回の入試で将来が決まってしまうのはとても残念である。途中でつまずいた際に、今の段階で夢を諦めてしまう子どもたちがあまりにも多い。その対策を考えていくことの必要性を改めて感じた。

市町村教育委員会でも、社会教育をもう少し頑張ってください、地域の大人を育てる意味で、生涯学習や社会教育の在り方を今一度問い直し、県全体で連携していく必要があると思う。

(新藤委員)

知事から40人学級について話があったが、それは皆さんも思っているところであると思われる。

現在、ほとんどの学校が定員割れしている中で、40人学級をキープしていくのは現実的に難しくなってくるかと思われる。

先ほど話した多様な子どもたちについても、少人数の方が通いやすいという側面は必ずあると思う。少人数だからできないのではなく、少人数だからこそできることが広がると思っている。

また、県内定着については、多様な子どもたちが学びを諦めて地域の中で生きていくという事例がかなりある。平間委員もおっしゃったように、そういう子どもたちでも学び直せる仕組みがあれば良いと思う。

(知事)

先ほどの中野委員の話聞いて思ったことがあり、近代教育のスタートは軍国日本の担い手を教育の中で育てることであったと思われる。それは教育勅語に始まり、いかに国家のために尽くす国民であるべきかであったが、戦後にそれがひっくり返った。しかし、教育のやり方は変わらずに、今度は経済大国を目指すため、いかに規格大量生産型の鉦工業等を目指す人材を作っていくかに変わっていった。

一方で今求められているのは、中野委員がおっしゃったように、いろいろな価値観が多様化していく中で、民主主義の担い手を教育の中で育成していかなければならない。

歴史的な転換点が1990年代頃からあったはずだが、なかなか転換できていないのが、青森県だけではなく日本全体の課題である。

先ほど、中学生についてより主体性が大事であると話があったが、私は高校も中学校もまだまだだと思っている。その1つの要因として、先生方が子どもたちを「言ってもわからない子どもたち」として、そのことを前提に言っているような気がする。

私自身は子どもたちといろいろな場面で接することがあるが、「学校が好きだ」「学校が楽しい」という子どもたちが多。この学校に来てよかったという生徒も多い一方で、先生方の対応について様々なことを言う子どもたちもいる。

1人1人の話をしてもしょうがないが、例えば学校によっては、「君たちの学年は今までで一番入試の成績が悪かった学年だから、君たちはできない生徒たちだ」と言い放ったり、個別の授業でも、「こんなことも分からないのか」、「この高校に入学しているのだから、これぐらいのことは分かっているだろう」という話を平然と言うなど、私たちがやろうとしていることと逆のことを、現場が当たり前のように行っている状況もある。おそらくこれは氷山の一角であり、閉じられた教室や学校の空間の中では、日常的に行われていることであると思う。

これを、民主主義の担い手であること含め、教育を転換していくことは非常に時間がかかり、難しい事であると思う。

先生のマインドセットというのはできなくはないと思う。何をしなければならないかがとても大事であるが、中野委員はどうお考えか。

(中野委員)

こうしたら上手くいくという答えがあるのであれば、日本の教育はあっという間に変わっていると思われる。私も40年間この研究をやっていて、全く変わらなく悲しい思いをしているが、「教えられたとおりに教えている」という現状が繰り返されているのだろうと思う。マインドセットをどうしていくかは、全く異なる価値観の授業を見るなどの方法が挙げられる。

しかし、実際にやってみると上手くいかないものである。「子ども主体」に、慣れてない子どもたちに、いきなりそういった授業をしても上手くいかない。

そして周りから「上手くいかないだろう。やはり今までどおりの方が良い。」といった声が挙がるなど、トライアンドエラーが許されていない実情がある。

命に関わることや怪我、こどものトラウマになってしまうようなことは許されない失敗かもしれないが、授業改善等にトライし、それが上手くいかなくてもその努力を認めていく風土はとても大事だと思っている。

どうすればうまくいくのかという答えにはなっていないが、やはり先生たちもトライアンドエラーを繰り返しながら授業改善を進め、急に改善することはできないと特に校長先生に理解していただきたい。授業改善に対して非常に前向きな校長先生もいらっしゃるため、みんなで頑張っていくしかないと思う。

県教育委員会としても先生方の研修の機会や、いろいろな学校を見る機会をたくさん作ってくださっている。それを見て、実行しようとした際に上手くいかない先生をどう支えていくかがとても大事である。

こうすれば上手くいくという教育はなく、児童・生徒たちに合わせて改善していかなければならないという試みを皆で支えていくのが大事であると思っている。

(知事)

今の話について、事務局を代表して長内理事から何かあればお伝えいただきたい。

(長内理事)

中野委員がおっしゃったこととも関連するが、「人は教わったように教える」ということは私もずっと言われてきた。

そこを変えていくためには、教えようとする人間が新しい成功体験や知見を得て、こうすればとてもいい方向に進むということ積み重ねていくことが大事であると思う。

そのため、少し時間がかかるが、いろいろな授業のかたちがあることを管理職の方にも理解してもらい、必ず若い先生方へしっかりと伝えて育てていくことが大事である。

中間層のミドルリーダーの方々にもそのポイントを押さえていただき、子どもたちの様々な選択肢を伸ばしていけるような教育活動を展開していければと思う。

(平間委員)

学校の現場でも若い先生方は柔軟な考え方を持っていてとても頑張っている。

しかし、そういった先生方が現場で孤立してしまったり、やり方が理解されなかったりと、とても悩んでいる先生方もいる。私も時々話を伺うが、学校経営する校長先生や、教頭先生たちの考え方で固まってしまうことがある。若い先生方も是非夢を持って子どもたちを教えられる現場であってほしいと願っている。

例えば、自分たちが若い先生の立場になったらどうするのか、校長先生になったらどうするのか、教育長になったらどのように教育を変えられるだろうか、そういった夢を持てるような組織であってほしいと感じている。

(知事)

私は対話集会を各学校で行っており、高校で行うとやはりその学校によって雰囲気異なる。同じやり方をしても「今日は上手くいった」という学校と、「あれ？」という学校も結構ある。コンセプトやスケジュールがはっきりしていると、先生方もしっかり動いてくれている。

私は先生たちが専門的な知識を持ち、各学校の教育に当たっていただいていることを、今の日本の良い教育を体現していただいていると思う。ただ、青森県も日本社会も次のステージへ行かなければならないタイミングであることを、みんなで共有することが大事であると思っているため、それを受け止めていただきたい。

最後に1つだけ申し上げなければならないことがある。

下北統合校の入札が不調となり、開校が遅れるのではないかとということ共有しておきたい。

令和3年7月上旬に下北統合校の案が発表され、11月12日にその案が決定された。この3、4か月の間に教育委員会の事務局の方々が地域に来て意見を聞いたり、私自身も当時の教育委員会の委員の皆さんを直接訪問し、いろいろな決め方も含め、もう少し地域の話聞いてくださいと言った。

決して統合すること自体に反対したわけではなく、もう少し地域と一緒に考えてほしいという話をした。しかし案が決まったという話になり、その際には私自身も教育委員会事務局に批判をしていたが、決まったことについて言ってもしょうがないため、逆に地域をまとめる方向に行った。

その際に教育委員会事務局から説明があったのは、令和9年度の開校に向けて、令和7年度に開設準備委員会を設置し、そこで教育内容や学校の名前、校舎の在り方を決めるという話であった。

私は、2年前にそれをスタートしてもさすがに間に合わないため、もっと早く実施してほしいと話をした。それは前例がないからなのか、全く聞いてもらえなかった。

では、むつ市を中心に地域で検討会議を設置するため、その中に県教育委員会も入ってもらい、一緒に高校の在り方を議論しようという話をした。

それがスタートしたのが令和5年6月で、今の市長になってから計5、6回その会議を開催し、学校の在り方や地域との関わり方等を丁寧に進めてきた。その大前提が令和9年の開校であった。

ここからが問題の本質となるが、これから中学生になるこどもたちは、もし開校が延期されることとなると、目指す高校がなくなる。具体的にいうと令和5年から今まで議論し、県教育委員会の皆さんが説明してきた内容が実現できないとなると、そのこどもたちが行く高校がなくなる。

それでは今の学校を残すのか。2年の間にどんどんこどもの数が減ってくるのに、どうするのかという話になる。

おそらくこれは地域にとってとても大きいことであると思う。

私は、統合を白紙に戻せなど、そういったことを言うつもりは全くないが、このことについてどのような形で責任を果たしていくのか、県教育委員会として早急に結論を出していただき、地域へ丁寧に説明をしていただきたいと、あえてこの場で皆さんにお願いをしたいと思う。

新聞やテレビがどう報道するかは分からないが、これは自分の地元のことだからではなく、県内の地域のこどもたちの高校進学にかかっている本当に重要なことであるため、是非早急に結論を出していただきたい。

魅力づくりや高校再編の大前提になると思われる。入札がうまくいかなかったというのはどうでもいいというか、何とでもなる話であるが、開校が遅れるということになれば、地域にものすごい影響があるため、是非その点は私から皆さんへお願いしておきたいと思う。

(教育長)

今日は知事や教育委員の皆さんといろいろ共有することができ、とても良かったと思っている。

こどもたちが持って生まれる才能は様々であり、その才能という花を開かせるためのことを、教育として取り組んでいかなければならないと思っている。才能というのは好きなものが才能であったりするため、その「好き」を見つけさせるためには、どういったことに取り組んでいくべきなのかを考えていかなければならないと思っている。

高校の魅力づくり検討会議について、私は最後の会議に出席させていただいたが、委員の皆さんはこの2年間にいろいろな思いがあり、最後に一言ずつお話してくださった。どの委員も青森県のこれからの学校の在り方や、子どもたちのためにどうすべきかを熱い思いで語り、検討結果報告書には2年間議論いただいた結果がまとめられていると思うため、これを軸にしたいと思う。

ただし、今は国の高校無償化の流れがあるため、県立高校としての在り方は、この魅力づくり会議の結果に基づきながらも、社会状況の変化に応じて変わっていかなければならないとも思っている。

県立高校について、46校あることのメリットを最大限に生かしていくためには、どういったことができるのか、子どもたちが自分の「好き」を見つけ、将来それに寄り添って生きていけるようになるためにも、教育委員会としてできることがまだまだあると思っている。

話に挙げた内容をこれから具体的に落とし込んでいくのは大変であると思うが、今後とも教育委員の皆さんや知事には、いろいろと話を伺いながら進めていきたいと思っているため、今後ともどうぞよろしくお願いする。